C，始末

シボドの火種は絶やさないのがふつうである。火の勢いを弱めながらも消えないようにする工夫が必要だった。「夕方7～8時ころが就寝時刻だったので、それにあわせて燠火になるように、くべ方を加減し、炉に掘った穴に燠になったサルケを置き、そのまわりを冷たい灰で縁取って火の粉が散らないようにしてから床についた」（事例③，五所川原市川山）という。

(9)煙とにおい

サルケを焚くと煙が生ずる。「部屋の中が真っ暗になってしまった」（事例⑫，旧木造町林）、「真っ黒になった。隣にいる人の顔も見えないほどだった」（事例⑰，旧木造町越水）、「顔も見えないほど煙った」（事例㊵，鶴田町木筒）というように、強烈なものだった。

『津軽口碑集』(1929)にはその様子が次のように描かれている。「家の入口には雪障けを造り、鴨居よりは懸け筵を下げたり。之を潜れば厩にいたり、折れて進めば居室に入る。床は唯板を張れるのみ。客訪へば畳み置きたる莫蓙を展べて薦む。炉には泥炭を焚く。黒煙濛々たり。咽びて頭を挙ぐべからず。炉の大きさは畳程あり。草鞋ばきの足を暖むるに便なり。其上には火棚ありて、時に湿れたる藁靴を見たりき。寝るには藁を敷て布を覆ひ、枕には長き砧状の木片を置きたり」[76]。かつて「掛けムシロ育ち」ということばがあったというが、この家もまさに鴨居に懸け筵で、貧しい庶民の家屋なのだろう。黒煙がもうもうと充満し、訪問した著者は咳が止まらなかったという。

なかでも、特に煙が激しいのは着火してまもない頃であった。筆者の調査では、「着火するまでの間が煙たかった」（事例⑭，木造町丸山）、「燃えてしまえば炭のようにホカホカとなった」（事例⑰，木造町越水）「火を付けてしばらくすると煙が収まってきた」（事例⑱，木造町柴田）、「燠火になると煙は収まった」（事例㊵，鶴田町木筒）という話を確認している。ユニークな事例としては、着火時の煙を排出するために特製の覆いを考案し、使用した人もいたという。（事例㉖，稲垣村豊川。図16は話者の証言にもとづき作成した模式図）。津軽地方には、着火時の煙のひどさをものがたる「さるけのくべたてや嫁逃げる」ということわざもあった[77]。

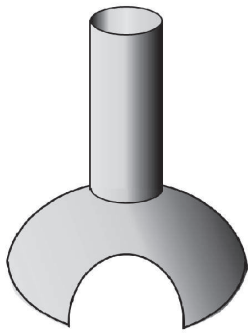

図16 模式図

サルケの煙には独特のにおい[78]があり、あらゆるものに染みついた。「よくないにおいが着物に付着した」（事例⑭，木造町丸山）「着るものをはじめ、すべてのものににおいが染みついた」（事例㉖，稲垣村豊川）「村に入るとサルケのにおいがした。着ているものがすべてにおった」（事例㊸，鶴田町横菏）「着るものから何からにおいがした。体にもついた」（事例㊹，鰺ヶ沢町南浮田）という。これらの話からもわかるように、このにおいは独特のもので、「よくない」においであった。

柳田國男は「一種独特の煙の香がする（中略）ので、通行の者にもすぐわかります。」とサルケのにおいについて紹介しているが[79]、この独特のにおいを衣服や身体に漂わせている人々に対する軽い揶揄の心情を伴った言説がしばしばおこなわれた。筆者の聞き取りでは、「変なにおいがして、町（木造町中心部）へ行くと『サルケ臭いなあ』と言われた」（事例⑨，木造町館岡）、「草を焼いたようなにおいがして、町（木造町中心部）へ行くと『サルケのにおいして、ホラ』と陰口をたたかれた」（事例⑫，木造町林）、「『神田橋[80]渡ればサルケカマリす』と言われた。金木方面に行くと『サルケカマリす』と言われた。」（事例㉖，稲垣村豊川）「サルケを焚いていない家にいくと『サルケ臭いな』と言われた」（事例㊸，鶴田町横菏）という。

においそのものには物理的な害はなくても、煙には人体に対する影響が少なからずあった。「煙たくて目に染みた」（事例⑧，木造町筒木坂）「とにかく煙たく、目や鼻や喉を刺激した」（事例⑯，木造町越水）、「咳が出てむせて息苦しかった。目を患う人も多く、ホウ酸の水溶液で洗眼した」（事例⑱，木造町柴田）、「目をわずらう人が非常に多かった」（事例㉔，車力村下牛潟）、「室内は煙たく、多くの人がトラホームになった」（事例㉛，森田村床舞）という。サルケの煙こそが眼病を患う原因になったと考える人々は多い。その治癒を神仏に祈願する民間信仰もさかんであった。『青森県の民間信仰』(1986)では次のように説明されている。「昔は、暖房、採光、炊事のために、いろりで薪を焚く日常生活では、いわゆる『眼くされ』が多く、貧乏人

サルケを焚いたときの煙（写真45）

は医者にかかることができにくかったので、薬師様、羽黒様などの神仏に祈願することが多かった。結果的には清水で洗って治る人もいたわけで、そのお礼に、穴のあいた石を奉納した」[81]。サルケの煙によって、目や肺をはじめ身体へ何らかの影響がもたらされることがあったと考えられる。

「煤がぶら下がって来て、柱も黒くなった」（事例⑱,木造町柴田）というように、梁から煤が垂れ下がるほどの煙であったが、煙には利点や活用法があった。鼠や害虫の駆除になったと考えられているほか（事例⑬,木造町丸山）「魚を捕ってきて火棚の上に置き（サルケの煙で）燻製にした」（事例⑲,木造町柴田）、「煤を油で練り、膏薬を作った」（事例㊸,鶴田町横菏）などの話も聞かれた。

難点はあったが「煙やにおいは当たり前なので慣れてしまった」（事例⑮,つがる市木造川除）「そのような状況に慣れてしまった」（事例⑯,木造町越水）というように、薪をはじめとする他の燃料を満足に得ることができない人々にとってサルケは生活必需品であり、煙とともにある暮らしがあたりまえであった。

(10)使用年代

筆者の聞き取りでは、「昭和15年頃まで」（事例③,五所川原市川山）、「昭和20年には使用されていた」（事例①,五所川原市長富）、「昭和20年頃まで」（事例⑫,木造町林）、「昭和22年頃まで」（事例⑰,木造町越水）、「昭和25年頃まで」（事例㉔,木造車力）、「昭和26年には使用されていた」（事例②,五所川原市長富）、「昭和27年当時も使用」（事例㊶,鶴田町木筒）、「昭和28-29年頃まで」（事例㉘,稲垣町沖善津）、「昭和20年代末頃まで」（事例㉙,森田町床舞）、「昭和40年代まで」（事例⑪,木造町兼館）、という回答を得た（具体的な年次は話者の生年等から換算）。

このなかで、「昭和15年頃まで」と比較的早い時期にサルケを使用しなくなった五所川原市川山の家では、主として購入したサルケを使用していた。聞き取りのなかで最も遅く、「昭和40年代まで」使用していたという木造兼館の家の燃料は薪が中心であったが、サルケも自ら採掘して使用したという。地域や家庭の事情によってさまざまではあるが、およそ昭和30年代ころまでは燃料として使用されたようである。

また、薪やオガクズ、石炭などのストーブの導入とサルケの利用の終焉には関連があるとも考えられるが、筆者の聞き取りでは、「サルケをストーブで焚いた人もいた」（事例㊹,鰺ヶ沢町南浮田）という証言もあり、また「鉄ストーブになってもサルケを燃やした」という報告[82]もある。当地方では、昭和中期頃を境として、炉をつぶした上にストーブを設置することがよくおこなわれたが、それを契機にすべての場合において燃料も変えられたわけではなかった。

(11)その他

①女性と子どもの役割

「オナゴ（女性）が（サルケを）掘っているのは見たことがない」（事例㊵,鶴田町木筒）というように、多くの場合、サルケを掘る作業の主役は男性であった。しかし、掘られたものを土手まで運んだり、乾燥させるためにひっくり返したり、家まで運搬したりする作業には、女性や子どもが大きな役割を果たしていた（事例①②,五所川原市長富、事例㊶,鶴田町木筒ほか）。『新きづくり風土記』（1999）には旧木造町菰槌の女性の手記が掲載されている[83]が、女性の視点から次のように述べられている。「暑いうちに溜池の水のない時を見計らって、サルケ（泥炭）を切るのです。男の人が切って、私達は乾かすために小高い所に運ぶのです。」話者が女性であるからこそ語られた内容というべきものである。掘るだけがサルケにまつわる作業のすべてではない。女性や子どもの果たした役割についても忘れてはならない[84]。

②採掘跡に関する事象

「春になって雪がとけると、サルケを掘った穴にフナが沢山入っており、よくフナ釣りに行った。色はいくらか黒かった」（事例⑭,木造町丸山）「ナマズ、フナ、カニなどがサルケを切った後のくぼみに入り込むため、子どもたちばそれを捕っておやつに食べた」（事例㊳,中里町大沢内）「キリッパで遊んだ。溜池の水が干上がるとそこに魚が入った。キリッパを囲い、フナ、ナマズ、カジカを捕った」（事例㉛,森田村床舞）などの証言から、サルケ採掘跡の条件を利用して食糧の採集がおこなわれたことがわかる。そして採掘跡で採られた淡水魚は燠になったサルケの上で炙られ、あるいはサルケの灰に埋められるなどして調理された。それらの行為は同時に子どもたちの遊びの要素を備えていた。採った魚は子どもたちのおやつであった。しかし、キリッパに落ちた子どもが亡くなるというできごとがあったため、大人はキリッパで遊ぶことを禁じたという例もみられた。

サルケについて述べるとき、サルケの採掘跡にまつわる事象についてはこれまでほとんど言及されてこなかったが、サルケとひとびとの関わりをここにも見いだすことができる。

③ネームバリューの活用

サルケはひとびとにとって、すでに過去のものである。しかし、かつて一大産地として知られたつがる市木造では、この名産に因んだ菓子がいまも売られている。灰色味を帯びた約15㎝×5㎝×2㎝の直方体の塩竈で、「さるけ菓子」と呼ばれる。店主によると、紫蘇やごまをあしらうことによりサルケの色調や質感を表現し、棒状に挿入した2本の色違いの粉で、サルケの根を象徴しているという。表面には、直方体を4等分できるように浅めの線が刻まれており、サルケの採取のために、あたかも「タヂ」で切れ目を入れたかのような雰囲気がある。線に沿って4分割された姿はサルケを堀りあげたときの一切れを彷彿とさせる。一口食べれば、みじん粉のやわらかな食感とともに、ふくよかな胡麻の香りと白砂糖の上品な甘さが口の中に広がり、舌の上ですっと消えていく。あとには紫蘇の香味がかすかな余韻をただよわせる。

創業天保元年（1830年）頃といわれる老舗「白丈（しろじょう）菓子店」の銘菓であり、生姜糖とともに古くから土産として人気が高い。筆者が取材に訪れた日には、宮城県への手土産にと3本を購入した人がいた。

包装紙には次のような由緒が記されている。

「開田のため山林の伐採することを禁ぜられた住民は『さるけ』を切り出しこれを乾燥させ燃料としました。この政策が功を奏し我が国有数の米所として津軽米を産する美田となりました。この新田開拓の偉業をしのびこれに因んで製造したのがさるけ菓子で原料はもち米、しその葉、胡麻、砂糖を用い精製加工したもので、四季を通じ特有の風味と香りは銘菓として絶大のご好評をいただいております。」[85]（原文ママ）

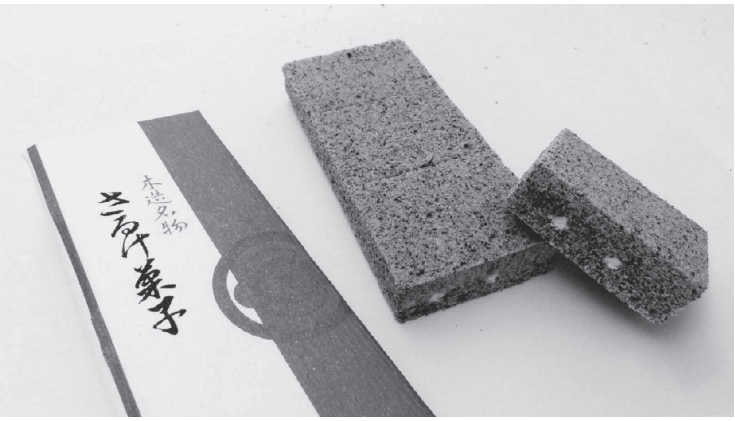

写真46　さるけ菓子（つがる市木造 白丈菓子店）

ひとびとの暮らしの中からサルケの煙が絶えて久しいが、名のみとはいえいまも生きる唯一のものが、この菓子である。かつての名産品としての価値が、別の文脈のなかで活用されている。これもまたサルケの利用形態のひとつである。

表１　調査項目と回答一覧（主なもの）

No	旧市町村	集落	性別	生年		暖房		炊飯		燃料の入手					
				元号	西暦	燃料	場所	燃料	場所	方法	どこから	いつ	道具	使用年代	1切の大きさ
1	五所川原	長富	女	大正14	1925	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	二ノ沢溜池	お盆前頃	テンツキ	（昭和20年にはおこなっていた）	
2	五所川原	長富	女	昭和5	1930	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	二ノ沢溜池			（昭和26年にはおこなっていた）	
3	五所川原	川山	男	大正13	1924	サルケ	シボド	―	―	採取	家の田			昭和15年頃まで	35～6cm×3～4寸
										購入	丸山	稲刈り後			
								ワラ	イロリ						
4	五所川原	唐笠柳	男	昭和12	1937	サルケ	イロリ			購入					
								木	イロリ	採取	長者山				
5	金木	嘉瀬	男	昭和7	1932	サルケ	シボド				清沢溜池	お盆前頃	スコップ		1スコップ分
											田				
6	金木	川倉	女	昭和6	1931	木	イロリ	木	イロリ→薪ストーブ						
7	金木	金木	女	昭和16	1941	木	イロリ	木	カマド	採取	山				
8	木造	筒木坂	女	昭和26	1951	サルケ	イロリ	―	―	採取	筒木坂の下の田				
						―	―	木	カマド						
9	木造	館岡	女	昭和5	1930	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	大溜池（館岡）	8月末～9月	テヅキのような道具		1尺未満四方×10cm
10	木造	平滝	女	昭和9	1934	木	シボド	木	シボド→薪ストーブ		村山から				
11	木造	兼館	男	昭和9	1934	サラケ	シボド	―	―	採取	田		スコップ	昭和40年代まで	
						木				購入	中里・喜良市方面				
						―	―	ワラ	カマド						
12	木造	林	女	大正15	1926	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	菰槌方面の湿地	田打ち前		昭和20年頃まで	1尺強四方
13	木造	丸山	男	昭和13	1938	サラケ	シボド	サラケ	カマド	採取	丸山の下の田		クワのような道具と平べったい道具		1尺四方×5～6cm
											丸山溜池	収穫後の秋			
14	木造	丸山	男	昭和9	1934	サルケ	ロブヂ	サルケ（＋ワラ）			丸山のヤヂ	夏	末広がりの平鍬、フォーク		20～15cm
15	木造	川除	女	昭和7	1932	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	3～4km西のカヤヤヂ	田植え前	柄の先に平たい鍬のついたもの		
										採取	豊川方面				
16	木造	越水A	男	昭和19	1944	サルケ	イロリ		カマド		緩沢溜池	夏			30cm × 20 ×7cm
17	木造	越水B	女	昭和11	1936	サルケ	イロリ	―	―	採取	家の田			昭和22年頃まで	
											丸山近くのヤヂ	お盆過ぎ頃	四角でまっすぐ切れる道具		
						―	―	木	イロリ	購入					
18	木造	柴田	男	昭和6	1931	サルケ	イロリ	サルケ	イロリ	採取	集落の外れの湿原		タヂ、テツキ		30 × 30 × 20cm
19	木造	柴田	男	昭和2	1927	サルケ	イロリ	サルケ	イロリ						
20	車力	富菟	女	昭和18	1943	木	イロリ	薪	イロリ						
21	車力	牛潟	女	昭和9	1934	木									
22	車力	車力	女	昭和6	1931	木	イロリ	薪	イロリ→薪ストーブ	採取	高山方面の村山				
23	車力	下車力	男	昭和12	1937	リンゴの木、オガクズ	オガクズストーブ	リンゴの木、オガクズ	オガクズストーブ	購入	金木、十三				
24	車力	下牛潟	男	大正12	1923	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	下牛潟の溜池	7～8月	タヂ・テヅキ	昭和25年頃まで	30 × 30 × 10～15
						木		木			営林署の山				

No	旧市町村	集落	性別	生年		暖房		炊飯		燃料の入手					
				元号	西暦	燃料	場所	燃料	場所	方法	どこから	いつ	道具	使用年代	1切の大きさ
25	稲垣	繁田	男	昭和8	1933	サルケ	イロリ	サルケ	イロリ	採取	田				30X30X30
											ヤヂ				1尺弱四方
26	稲垣	豊川	男	昭和3	1928	サルケ	ロブヂ			採取	繁田方面の田		タヂ・テンツキ・クワ		1尺四方X5寸程
											ヤヂ				
											クサヤヂ				
											カヤヤヂ				
								ワラ、木	ロブヂ→S23頃カマド→ガス						
27	稲垣	沼崎	女	昭和16	1941	サルケ					田		タヂみたいなもの		1尺四方
											ヤヂ				
28	稲垣	沖善津	女	昭和24	1949	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	館岡			昭和28～29年頃まで	
29	森田	床舞	男	昭和17	1942	サルケ	シボド	―	―	採取	狄ヶ舘溜池				
								木	シボド	採取	里山から			昭和20年代末頃まで	
30	森田	床舞	女	昭和19	1944	サルケ				採取	狄ヶ舘溜池				
31	森田	床舞	男（2名）	昭和11 昭和20	1936 1945	サルケ	ロブヂ			採取	狄ヶ舘溜池			子どもの頃	
								枝葉	イロリ→薪ストーブ	採取	持山や村山			子どもの頃	
32	森田	床舞	男	昭和9	1934	サルケ	シボド	リンゴの枝、木	シボド	採取					厚さ10cm煉瓦状
33	森田	上相野	男	昭和12	1937	サルケ	イロリ								
34	森田	下相野	男	大正13	1924					採取			カナベラ		
35	中里	竹田	男	昭和8	1933	木		クズガヤ、ワラ							
36	中里	竹田	男	昭和12	1937	杉の葉、木	シボド	カヤ	シボド	採取					
37	中里	下豊岡	男	昭和24	1949					（商品化を考えた）					
38	中里	大沢内	男	昭和15	1940	木	イロリ→薪ストーブ（S22頃）	薪	イロリ	採取・購入	集落西方の里山				
39	中里	富野	男	昭和9	1934	サルケ	シボド	サルケ	シボド	採取	田	田植え前	鍬のようなまっすぐな刃のついた道具		30cm四方
											竹田方面の湿地				
						木		木		購入	牛潟や中里方面				
40	鶴田	木筒A	男	昭和9	1934	サルケ	シボド	―	―	採取	廻堰大溜池	秋の初め	タヂ、カナベラ等		30～25cm四方×15cm
								木（カポシ、リンゴの枝）	シボド	採取	馬の飼料を採る山				
41	鶴田	木筒B	男	昭和3	1928	サルケ	ロブヂ	稲ワラ	ロブヂ	採取	廻堰大溜池	秋の初め		昭和27年当時も使用	1尺四方
42	鶴田	鶴田	男	昭和16	1941	流木	シボド	流木	シボド	採取	十川				
43	鶴田	横苑	女（2名）	昭和7 昭和10	1932 1935	サルケ	シボド			交換	千貫（車力）	秋			重箱ほど
								木（リンゴ）、稲ワラ	屋外						
44	鰺ヶ沢	南浮田	女	昭和8	1933	サラケ	シボド→薪ストーブ	サルケ	シボド→薪ストーブ	採取	広岡（木造）	4月～5月前			

3. まとめと課題

筆者の目的は、多くの方々の生きたことばに触れることを通じて、サルケとともにあったひとびとのくらしについて学ぶことであった。聞き取りの事例数は50に満たないが、この限られた事例からですら、この地域におけるサルケの利用と、それにまつわる事象が、想像をはるかに超えていかに多様であるかということを窺い知ることができた。

従来の報告と今回の調査内容を重ね合わせたときに浮かび上がる問題について記し、筆者の今後の学習課題としたい。

(1)採掘における女性や子どもの視点

一連の作業のなかで「掘る」作業にこそ特徴的な作法や道具がみられ、それが「主要な」作業であると認識されるためか、自治体誌や民俗誌等では、行為の主体である男性の役割のみがクローズアップされる傾向がある。そして、「運ぶ」「ひっくり返す」などの「副次的な」作業に関わっていた女性や子どもの役割を描いているものが、青森県内の自治体誌のなかに見られない[86)]。

いっぽう、「田村根ッコ」（泥炭）で知られる秋田県横手市の自治体誌『横手市史』(2006)では、採掘は家族と使用人とでおこなったこと、乾燥させた泥炭の運搬は子供の仕事であったこと、土を丸めてタドンにする作業を娘たちが手伝ったこと、女性にとっても重労働であったことなどが詳しく記されており、より広い視野に立った描写がおこなわれている[87)]。

筆者はこういった事情を念頭において、女性からの聞き取りを意識的におこなうようこころがけた。サルケの採掘にまつわる女性や子どもの役割については、2.（11）①で述べた。本県自治体誌の報告書においては言及されていなかった一面を窺い知ることができたのは一応の成果であった。

(2)利用の多様性

従来の報告書では、「燃料」としての利用法を述べる場合、「冬季の暖房用」とするものが多く、炊飯を含めた煮炊きや風呂焚きなど、燃料としての多様なありかたが描かれない場合が多かった。「サルケは冬期の暖房用燃料である」というのが、なかば通念となってしまっている。また、「燃料以外」の利用法については、ほとんど言及されて来なかった。

調査を通じて見いだされたサルケの利用法の多様性については2.(7)で詳しく触れた。実際にはこれ以上に多様な利用法があったものと想像される。従来の報告書に記されるイメージを前提とした場合には見えなくなってしまうさまざまな側面について、問うていくことが必要であると考える。

(3)利用された地域や時代、動機について

津軽地方において過去にサルケを盛んに利用した地域は、岩木川下流域の平野部を中心とした地域であったと考えることができる。ただし、調査をおこなうと、使用されていた範囲は予想以上に広く、いわゆる「山ドゴ」（山に近い里）であって村山や持ち山の柴を利用できる地域や、リンゴの選定枝や流木を利用できる地域であっても、利用の程度の強弱はあれ、サルケを使用する場合がみられた。また、岩木川下流域の平野部では水稲や大豆の栽培がさかんであり、稲ワラやマメガラなど、火持ちはよくないが強い火力を生み出すことができる燃料に恵まれていながら、たとえば炊飯にサルケを利用する事例もみられた。使用されていた時代についても、予想以上に近年まで利用されており、薪や油の入手が往時よりも比較的容易になった高度成長期においてすら、未だストーブの燃料として利用していたという例があった。これらの例から、利用の動機は必ずしも燃料の不足を補うためという消極的なものではなく、むしろ好んで生活の中に取り入れる意識も少なからずあったと考えられる。筆者は本文冒頭で「海や山から離れたこの平野部では、燃料となる薪を手に入れることが難しかった」ことからサルケが重宝されたと述べたが、じつは粗雑で漠然とした表現であり、ものごとのひとつの側面をいいあらわしたに過ぎない。焚きものに事欠かない地域や時代にどのように使用されていたか、その理由は何であったか、対象を拡大して確かめる必要がある。今後の課題である。

(4)他地域との比較

下北地方（青森県東北部地域）でも泥炭を生活のなかに取り入れていた人々があったことが、『奥内の民俗』(1996）のなかで次のように記されている。

「昔、田名部まで3里の道を歩いて買物に行ったが、途中、金曲部落の所で四角に切った土の塊を干してあるのをよく見かけた。聞いてみたら薪にするのだというから、土を燃やすのかと驚いたという。金曲部落は津軽から来た人たちが入植したところだというから、この土の塊がサルケ（泥炭）のことのようである」（大正6年生まれ、女性）[88)]

『東北と北海道のアイヌ語地名考』(1957)では、下北地方（田名部）の開墾地で泥炭を利用していたことが、写真とともに次のように紹介されている。「苫部平と呼ばれていた田作地を歩いていたらば、路傍に猿毛が積んである。採って見ると北海道でいう泥炭で、葦類の茎や根の累積であった」[89]。

泥炭が埋蔵されている地域は県内の随所にあると考えられる。しかし必ずしも利用されるわけではない。上記の例における利用の動機は不明である。『奥内の民俗』(1996）では「金曲部落は津軽から来た人たちが入植したところだというから」[90]と説明されている。慣れ親しんだ燃料を利用しようというのは動機のひとつであると考えられる。

県内における庶民の泥炭利用については、本稿で取り上げた岩木川下流域がよく知られているが、県内の他地域について記す文献は圧倒的に少ない。実態を知りたいところである。

(5)周辺事象

「サルケ」を取りあげるとき、サルケというモノそのものの取り扱いについて目が向けられがちであるが、その周辺ではさまざまなできごとが起きている。このことについては、2.(11)②および③をはじめ、1.の事例報告の随所で触れたが、あらためて列記したい。

①耕地の改良　　田でサルケを掘ると田が低くなるため、客土をおこなう。このことが耕土の改良につながった[91]。場合によっては、高い位置にある田を低くすることが、灌漑不良を改善することにもつながった[92]。

②遊びと食糧採取　　ヤヂや溜池の採掘跡は、子どもたちの格好の遊び場となった。窪地の水たまりに集まるフナやエビ、ナマズなどは、地域のひとびとの食糧となり、子どもたちにとってはその採取が遊びを兼ね、同時におやつとなった。それらを調理する際の火はまさに、サルケの火であった。

③煤と煙　　火につきものの強烈な煙は、草屋根や柱の結びナワなどの腐植を防いだ。垂れるほどに家屋の随所にまとわりつく煤からは、膏薬が作られ、治療に用いられた。多量に生じるサルケの灰は灰肥として利用された[93]。猛烈な煙により眼病を患ったと考える人が多く、さまざまな行為を通じて治癒を祈願する民間信仰にもつながった。

④商業的利用　　肥料としての商業的な活用が検討された。泥炭の炭化の進行にともなって発生するガスを、公衆浴場の燃料として利用することもおこなわれた[94]。この地域に点在する公衆浴場の湯には、泥炭層の影響を受けたと思われる湯をもつものもあり、さかんに利用されてきた。また、サルケそのものではなく、名産としての価値を間接的に利用して、名物（「さるけ菓子」）が創作され、現在も販売されている。

以上のように、サルケは、この地域における生業や衣食住や信仰などと多様なかたちで結びついている。サルケについて知ることは、この地域のくらしのありさまを知るひとつの手掛かりとなる。視野を拡大して観察したい。

謝辞

調査にあたり、対象地域に居住の多くの方々の御協力を賜りました。話者の方々はもちろんのこと、話者を紹介してくださった方々に心から感謝を申し上げます。藤枝市郷土博物館・文学館、鶴田町教育委員会、白丈菓子店から資料を提供していただきました。「西郊民俗の会」では貴重なご助言と励ましのことばをいただきました。記して御礼申し上げます。

注）

2) 県内では、地域あるいは人によって「サラケ」と発音する場合もある。また、古くは県内で「ヤチワタ」とも呼ばれていたという記録がある（注5の文献)。以下「サルケ」で統一する。）

3)『新版地学事典』(地学団体研究会 新版地学事典編集委員会編,平凡社,1996）では「湖沼,河川の後背湿地など排水不良地に生育する草本・樹木類およびコケ類などの遺体が,還元状態で堆積した未分解の有機物質」と定義している。泥炭のなかでとくに草本類を主体とするものを「草炭」という場合があるが、これも「泥炭」に含まれる。

いっぽう、津軽地方と秋田県横手地方の泥炭の利用について報告している野本寛一は、「平地水田地帯の民俗－津軽の『サルケ』を緒として－」のなかで、サルケについて「津軽平野のサルケは母植物に草本類が多い点から草炭と見ておく」、「横手盆地のネッコは松の幹などが出るところから泥炭と称してもよかろう」と述べ、木質に富むものを「泥炭」とし、「草炭」とは区別して用いている。また、松木明は『弘前語彙』の「さるけ」の項で、サルケを「泥炭、草炭」であるとし、「炭化の最も低い暗褐色の土塊状のもので、蘚苔類、イネ科の植物などが湿地に堆積して変成したもの」と定義している。こういった解説からすれば、岩木川下流域のものは泥炭のなかでもとくに「草炭」とよばれるものに相当すると言えるかもしれない。

ひとくちに「サルケ」と言っても質はさまざまであり、植物遺体の分解の進度も、有機物の含有量も、構成植物の種類も異なっており、筆者の聞き取りのなかでも、「タザラケ」や「ボヤリ」など質の違いを表現する複数の呼称がみられ、また、特別の呼称はなくとも経験上の知識によってそれらを分別していることがわかった。これらは『新版地学事典』(平凡社,1996）の定義に照らしてすべて「泥炭」と呼んでよいと見られる。

また、この地方の人々も「サルケとはデータンである」と説明するケースが多くみられた。この場合、話者は「データン」ということばを科学的な根拠にもとづいて用いているわけではない。周囲でおこなわれている言説を借用しているに過ぎない。それは「サルケ」ということばと同様

口頭で伝承され、そのように呼び習わされてきたことばであり、一種の民俗語彙である。

以上のことをふまえ、筆者としては、科学的な分析をおこなったわけでもなく専門的知識も全くないため、厳密な用語としてではなく、あくまで一般的に使用されるレベルのことばとして「泥炭」という用語を用いたい。

4)『津軽見聞記』(青森県立図書館1930「青森県立図書館叢書」第一篇) p.17

5)柳田國男・山口貞夫1939『居住習俗語彙』国書刊行会,p.220

6)菅江真澄『そとが浜風』(内田武志宮本常一編『菅江真澄全集』第一巻1971 未来社) p275, 天明5 (1785) 年8月11日の条

7)菅江真澄『雪の出羽路 平鹿郡七』(内田武志・宮本常一編1976『菅江真澄全集』第六巻,未来社)p.251

8)比良野貞彦『奥民図彙』(山田龍雄ほか編1977『日本農書全集』1)p.148

9)「旧市町村」とは、ここでは2005(平成17) 年の合併直前時点での市町村を意味する。

10)「地区」とは、ここでは同一の字名を冠する地域を意味する。

11)岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三巻(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」)p.352

12)前掲注11) pp.350-351

13)前掲注11) p.305

14)内田邦彦1929『津軽口碑集』郷土研究社,p.76

15)前掲注11) pp.186-187

16)前掲注11) p.179

17)平尾魯仙『合浦奇談』巻二 (弘前市立図書館蔵)

18)ちなみに、泥炭地に生息する生物が真っ黒であることを菅江真澄は次のように記している。「土の黒キゆゑにや虫さへ黒し。黒き蚯蚓、くろき蜻蛉のいと小キが多し」(菅江真澄『雪の出羽路 平鹿郡七』(内田武志・宮本常一編1976『菅江真澄全集』第六巻,未来社,p.262)

19)前掲注14) p.34

20)森山泰太郎1976『陸奥の伝説』pp.98-99「弘法のサルケ」

21)今村義孝、今村泰子編著2005『秋田むがしこ』pp.265-267,無明舎出版

22)前掲注11)p.156

23)東西約1km、南北約2km、面積1.4km^2。三湖が内陸部に深く湾入していた名残であるとされ、近年まで周囲には広大な湿地帯があった(「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1985『角川日本地名大辞典2 青森県』角川書店p.554)

24)前掲注11)p.156

25)柳田國男1944『火の昔』実業之日本社 (1970『定本柳田國男集』第二十一巻、筑摩書房)p.268

26)鉄バクテリアが繁殖した赤い水のことを「ソブ」といい、「ソブが湧いた」という地方があるという (谷川健一編1994『民俗と地名』(『日本民俗文化資料集成』第十三巻,三一書房) p.544より。ただしこの説明は前川文夫『日本人と植物』からの引用である)。静岡県藤枝市では泥炭のことを「ソブ」といっているが、森山泰太郎が「泥炭は、乾くと赤すすけた色になり」と述べている (宮本常一ほか編1970『日本庶民生活史料集成』第十巻p.253) ように、泥炭を指すことばとしての「ソブ」は金気のある水を意味する「ソブ」と関連があると考えられる。

27)竹田、長泥、鳴海、芦野、福浦、豊岡、豊島、富野の9つの集落の総称。「武田」地域の中に「竹田」地区が含まれる。

28)中里町1965『中里町誌』p.174

29)山口弥一郎「津軽十三湖岸の開拓」(山口弥一郎1943『東北の村々』所収)pp.52-53

30)松木明1954『弘前語彙』(松木明2010『津軽語彙』津軽書房所収)p.190

31)野本寛一2005「平地水田地帯の民俗ー津軽の『サルケ』を緒として」(『地域学』三巻)p.71

32)前掲注6) に、「谷地綿とは木の朽ちたるごときもの」との記述がある。

33)大正9年の新聞連載記事 (1928『雪国の春』として刊行、本文は1972『定本柳田國男集』第二巻p.115からの引用)

34)前掲注5) p.220

35)前掲注31) pp.69,73

36)山田秀三1957『東北と北海道のアイヌ語地名考』楡書房p.32

37)前掲注30)p.189

38)前掲注11)p.156

39)宮本常一ほか編1970『日本庶民生活史料集成』第十巻p.253 (森山泰太郎による『奥民図彙』の補注)

40)前掲注7) pp.251,262

41)五所川原市編1993『五所川原市史』史料編Ⅰp.486

42)青森県木造地区農業改良普及所編1982「森田村生活誌『さるけと詩のなかで』p.61

43)前掲注31) p.72

44)秋田県大雄村田根森付近で採掘される「根子」(ネッコ、泥炭) は、「一番堀」「二番堀」「三番堀」と進むにつれて品質が落ち、色が真っ黒な一番掘が最良のものであったと記される。前掲注7) p.251

45)前掲注14) p34

46)長尾角左衛門1957『三好村郷土誌』三好郷土誌刊行会,p.35

47)前掲注31) p.67

48)人物のイラストは増田陽一による

49)前掲注11)p.156

50)青森県史編さん民俗部会2014『青森県史 資料編 民俗 津軽』および、青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編2008『岩木川流域の民俗』

51)前掲注31,前掲注41など

52)横手市編2006『横手市史　特別編　文化・民俗』横手市p.542

53)「負担が軽減される」といっても重労働であることに違いはなかった。筆者の聞き取りのなかで、あるいは県内のサルケに関する調査報告書からは見いだすことができなかったが、乾燥後の泥炭ですらその運搬がたいへんな労働であったことは「乾燥が終わると家に持ってくるが、（中略）重労働であった」という横手市史の記述（前掲注52）p.542）からも推察することができる。

54)青森県木造地区農業改良普及所編1982森田村生活誌『さるけと詩のなかで』p.59

55)前掲注30）p.190

56)前掲注25）p.268

57)前掲注6）

58)前掲注41）p.460

59)青森県史編さん民俗部会2014『青森県史 資料編 民俗 津軽』p.186

60)前掲注11)p.156より、四大区七小区（現在の稲垣豊田、繁田、沖善津、再賀周辺域）についての記事である。

61)山口弥一郎『開拓と地名』のなかでは、「小山内氏の『津軽考』」（筆者注：この出典について未確認）からの引用として「薪にかえて常に炊飯の用とす」と記されているが、炊飯の用途に言及している数少ない例である。

62)青森県立郷土館1998『「再賀の民俗」調査報告書』（青森県立郷土館調査報告第42集・民俗－21)p.53

63)青森県史編さん民俗部会2014『青森県史 資料編 民俗 津軽』p.186

64)前掲注63）p.188

65)森山泰太郎1972『日本の民俗　青森』p.59

66)前掲注31）p.68

67)前掲注31）p.85,87および,横手市編2006『横手市史　特別編　文化・民俗』横手市p.542

68)前掲注8)p.148

69)楠本正康1981『こやしと便所の生活史－自然とのかかわりで生きてきた日本民族』ドメス出版pp.139-140。同書では小便を掛けたときの臭気や厩の臭気を除去する消臭剤としての役割も指摘されている。それは科学的事実だとしても、馬とともに暮らしていた当時のひとびとにとって、厩のにおいが「臭気」として問題化されていたかは不明であり、ひとびとがサルケに対して積極的にそのような意味づけをおこなっていたかについてはわからない。また、「津軽地方は泥炭地帯が拡がっているため、耕作はまったく行うことができず、不毛の地である。」という記述には疑問を感じる。

70)藤枝市2002『藤枝市史』別編 民俗p.644

71)宮本常一ほか編1970『日本庶民生活史料集成』第十巻p.253

72)前掲注69）p.139

73)前掲注7）pp.251,260）

74)前掲注7）p.262）

75)東奥日報社2006

76)前掲注14）序文

77)前掲注14）p.76

78)一般に、よいにおいがする場合には「匂う」、よくないにおいがする場合には「臭う」という漢字を用いるようである。また、特に快い刺激については「香り」ということばも用いられる（参考：松村明編1988『大辞林』三省堂pp.1828-1829)。サルケのにおいについて、例えば柳田國男は「香り」という肯定的なことばを使用しているが（柳田國男1944『火の昔』実業之日本社（1970『定本柳田國男集』第二十一巻、筑摩書房、p.268)）、「悪臭」と断じる記述もある（例、岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三巻(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」p.156)。においをどのように受け止め、表現するかは個人の主観にもとづいておこなわれるものである。そのにおいを心地よいものとするか不快なものとするか、あるいは生活のなかで当然のものとしてあり認識すらされないようなものであるかについては、生活者の立場から判断されるべきものであって、私の感想に基づいて語彙を選択するのは適当でないと考える。「におう」ということばも、語源的には現在用いられている一般的な意味合いとは異なるものではあるが、ここでは仮に「におい」というひらがなの表記を用いたい。

79)前掲注25）p.268

80)岩木川にかかる橋で、川向こうは薪炭材の豊富な五所川原市金木地区である。

81)小舘衷三1986『青森県の民間信仰』北方新社,P.28

82)前掲注31）p.68。五所川原市長富の事例。

83)宮本朋典編1999『新きづくり風土記』木造町老人クラブ連合会p.47

84)この点、『横手市史』における「ネッコ」（泥炭）についての記述のなかでは「ネッコ小屋に運んだが、これは子供の仕事であり幾日もかかった」「娘たちもネッコの表面を覆う黒土を丸めてタドンにする作業を手伝わされた」「担いで男は一〇〇、女は五〇も持ってくるので重労働であった」というように、泥炭採掘にまつわる子どもや女性の役割について述べられている(横手市編2006『横手市史　特別編　文化・民俗』横手市pp.506,542)

85)白丈菓子店「さるけ菓子の由来」（菓子の包装紙に印刷された文章より)。

86)自治体誌ではないが、前掲注31）,p.68では女性に対する聞きとりがおこなわれている。

87)前掲注52) pp.505-507,およびp.542
88)青森県立郷土館1996『青森県立郷土館調査報告書第38集「奥内の民俗」調査報告書』青森県立郷土館,p.64
89)前掲注36) p.32
90)青森県立郷土館1996『青森県立郷土館調査報告書第38集「奥内の民俗」調査報告書』青森県立郷土館,p.64
91)前掲注46) p.35
92)前掲注31) p.67
93)前掲注69) p.139
94)車力村史編集委員会編1973『車力村史』車力村役場p.159

参考・引用文献一覧

著者不詳「津軽見聞記」(青森県立図書館1930「青森県立図書館叢書」第一篇)
比良野貞彦『奥民図彙』(山田龍雄ほか編1977『日本農書全集』1)
菅江真澄『そとが浜風』(内田武志宮本常一編1971『菅江真澄全集』第一巻,未来社)
菅江真澄『雪の出羽路』(内田武志・宮本常一編1976『菅江真澄全集』第六巻,未来社)
平尾魯仙『合浦奇談』巻二　弘前市立図書館蔵
岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三巻(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」)
内田邦彦1929『津軽口碑集』郷土研究社
山口弥一郎1938「津軽十三湖岸の開拓」(山口弥一郎1943『東北の村々』所収)
柳田國男・山口貞夫1939『居住習俗語彙』図書刊行会
柳田國男1944『火の昔』(1970『定本柳田國男集』第二十一巻、筑摩書房所収)
松木明1954『弘前語彙』(松木明2010『津軽語彙』津軽書房所収)
山田秀三1957『東北と北海道のアイヌ語地名考』楡書房
長尾角左衛門1957『三好村郷土誌』三好郷土誌刊行会
中里町1965『中里町誌』中里町
宮本常一ほか編1970『日本庶民生活史料集成』第十巻
森山泰太郎1972『日本の民俗 青森』第一法規出版
車力村史編集委員会編1973『車力村史』車力村役場
森山泰太郎1976『陸奥の伝説』第一法規出版
森山泰太郎1977『青森の伝説』(『日本の伝説』) 角川書店
楠本正康1981『こやしと便所の生活史ー自然とのかかわりで生きてきた日本民族』ドメス出版
青森県木造地区農業改良普及所編1982「森田村生活誌『さるけと詩のなかで』
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1985『角川日本地名大辞典2 青森県』角川書店
小舘衷三1986『青森県の民間信仰』北方新社
松村明編1988『大辞林』三省堂
五所川原市1993『五所川原市史 史料編 Ⅰ』五所川原市
谷川健一編『民俗と地名』(『日本民俗文化資料集成』第十三巻) 三一書房
地学団体研究会 新版地学事典編集委員会編1996『新版地学事典』平凡社
青森県立郷土館1998『「再賀の民俗」調査報告書』(青森県立郷土館調査報告第42集・民俗ー21)
宮本朋典編1999『新きづくり風土記』木造町老人クラブ連合会
藤枝市2002『藤枝市史 別編 民俗』藤枝市
野本寛一2005「平地水田地帯の民俗ー津軽の『サルケ』を緒として」(『地域学』三巻)
横手市編2006『横手市史　特別編　文化・民俗』横手市
青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編2008『岩木川流域の民俗』青森県
青森県史編さん民俗部会2014『青森県史 資料編 民俗 津軽』青森県